

トーマス・L・ケネディ著
細見和弘訳

『中国軍事工業の近代化』

——太平天国の乱から日清戦争まで——

昭和堂 二〇一三・四刊
A5 二四〇頁 二八〇〇円

本書は、一九世紀後半の清朝を対象として、この時期に行われた近代軍事工業建設の成果と限界を明らかにし、この時代が中国の近代軍事工業史においていかなる地位を占めているのかを論じている。

原著は、*“The Arms of Kiangnan: Modernization in the Chinese Ordnance Industry, 1860-1895”*の書名で一九七八年に出版された。著者は、日清戦争の敗北が清朝の軍事工業失敗の決定的証拠と理解されてきたことに対して、様々な問題を含みつつも兵器生産の大きな成長を達成した、中国の初期近代化を考える上で鍵となる諸課題を有する重要な研究テーマであるとする。本書は、洋務運動期の軍事工業近代化に対する評価が低かった中国でも注目され、一九九二年には『李鴻章與中国軍事工業近代化』（四川大学出版社）の訳名で翻訳出版されている。

本書の構成は、清朝における近代軍事工業の草創期から日清戦争の敗北に至る三五年間を時系列順に追う形をとっており、洋務運動期の近代軍事工業の発達過程に関する詳細な情報を与えてく

れる。

本書は、中央政府、工業を建設する総督・巡撫やその他の地方官僚、工場を管理する総督、技術指導を行う外国人技術者といった軍事工業建設に関与した多数の人物について分析を行い、彼らが軍事工業近代化において果たした役割、軍事工業化の方針に関する政策決定過程について明快な像を浮かび上がらせることに成功している。

その中でも特に注目されるのが、軍事工業建設における李鴻章の果たした役割である。李鴻章は、清朝における軍事工業の導入者である曾國藩の後継者として、上海、南京、天津における軍事工場の経営、人事、財政面で強い影響力を発揮し、各工場での軍需品の生産を特化させるといった調整者としての役割を果たすようになる。これは、清朝の近代軍事工業導入が、中央政府主導ではなく内乱に直面した地方官僚主導による技術導入と工場建設という形で着手されたため中央政府の一元的政策が十分でなく、それを補うために李鴻章が調停者として振舞ったとされている。この時期の軍事工業における李鴻章の存在の大きさは、本書の中国語訳タイトルが、『李鴻章與中国軍事工業近代化』となっていることから窺うことが出来る。

一九世紀後半は、産業化を背景に軍事技術の目覚ましい発展が見られた時期で、前装式小銃から後装式ライフル小銃への移行、弾薬や火薬の改良など様々な変化が生じていた。本書は、各工場で生産される武器・弾薬の性格と生産の実情を丹念に描写することで、軍事工業に携わる人々が急速な変化にいかに対処しようと

したのか、その達成点と問題点とを含めて分析を行っている。

本書は洋務運動期の軍事工業史を考察する上では欠かせない著作であり、原著の刊行から三六年を経ても本書の提供する視座や研究方法は学ぶべき所が多い。そのような著作が日本語で読めるのは喜ばしいことである。

(鈴木昭吾)